

②富勢地域ふるさと協議会と富勢近隣センター

・地域の概要

昭和29年に合併するまでの旧富勢村の区域にあたり、布施、根戸、宿連寺等の旧集落が存在する。特に布施は、利根川の渡しや河岸、布施弁天などによって近世より栄えた集落で、現在も立派な家並みが残る地域である。高度経済成長期以降、昭和50年頃に開発された三井住宅や北柏駅付近の市街化が進展した。

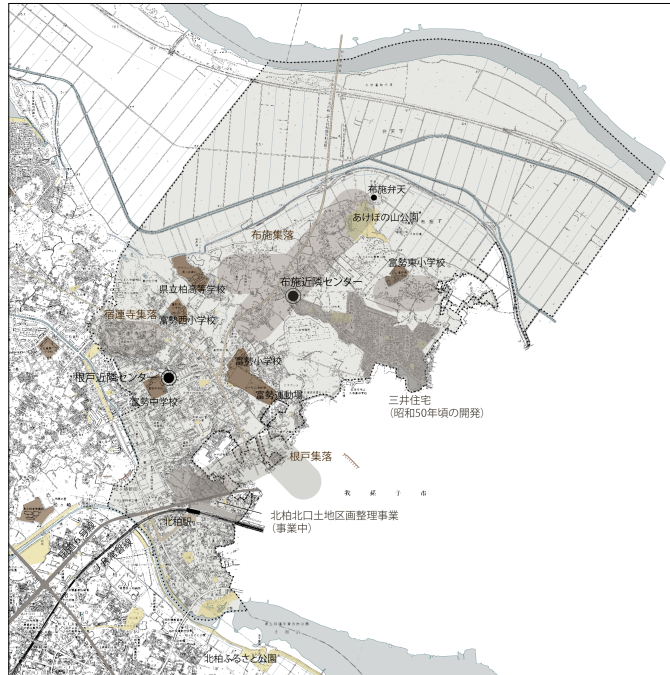


図2-29 富勢地域空間構造



写真2-6 布施の家並み



写真2-7 布施弁天



写真2-8 あけぼの山農業公園



写真2-9 三井住宅

(写真提供：写真2-6～2-9 三牧浩也)

③松葉地域ふるさと協議会と松葉近隣センター

・地域の概要

もともとは旧集落に挟まれた低地で、田畑山が混在する地区である。全体が旧公団住宅の新規開発地域であり、昭和56年頃から入居を開始している。

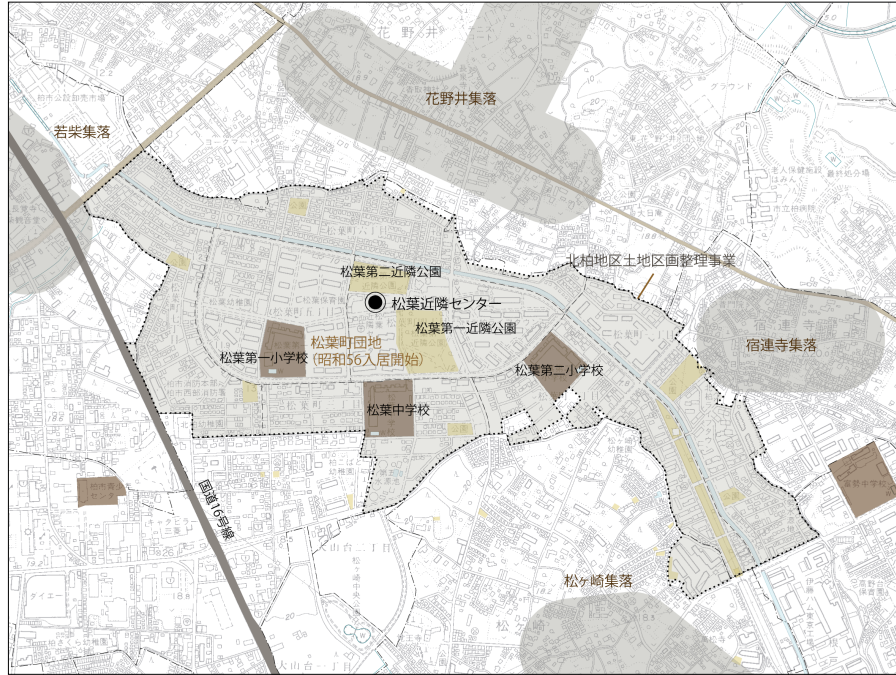


図2-30 松葉地域空間構造



写真2-10 団地地区



写真2-11 戸建て地区



写真2-12 メインストリートけやき通り



写真2-13 中央商店街

(写真提供：写真2-6～2-9 三牧浩也)

【ふるさと協議会へのヒアリング】

行政に対するヒアリングではふるさと協議会全体の成果や課題を整理することができた。一方で個々の協議会の実態を把握するために、北部地域の3つの地域を対象にヒアリング調査を行った。協議会の設立の経緯や活動内容、抱えている課題などを整理したが、このうち田中ふるさと協議会はUDCKの構成団体として創設当時から関わってきたため、UDCKとの関係や今後の関わりについて調査した。(表2-5、2-6)

また、富勢地域と松葉地域については2009年度に行われたUDCKの研究活動「柏の葉コミュニティグリッド」として著者も学生メンバーとして携わり、この研究で得られた内容を引用することとする。

表2-5 田中地域 ふるさと協議会ヒアリング概要

内容	回答
構成団体になった経緯	柏の葉におけるソフト面のまちづくりを田中地域の住民と一緒にやっていきたいという呼びかけがあった 地元の住民も新しい開発が行われることに対して興味があった
求められた役割	地域のまちづくりは地元の住民がつくっていくものであり、地域の特徴をUDCKに反映してほしいと言われた
果たしてきた役割	地域住民とUDCKを繋げる役として機能した→イベント時の人集めやお祭りの協力など (当初は何をして良いのかわからなかったが、徐々に役割を認識してきた)
柏の葉のまちづくりに携わったことで変わったこと	まちづくりに対する意識が変わった ハードの整備だけがまちづくりだと思っていたが、ソフトのまちづくりの重要性に気づいた
関わっている活動	ふるさと田中みこし祭り 農あるまちづくり協議会 運営委員会

表2-6 ふるさと協議会ヒアリング内容

	田中地域ふるさと協議会	松葉地域ふるさと協議会	富勢地域ふるさと協議会
協議会節立の経緯	—	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当初より公団や市が主体となって町会・自治会の設立を誘導。昭和58年には代表の初会合を開催。 ・ 昭和59年にふるさとづくり協議会発足 ・ 昭和62年に近隣センター開設 ※もともと出張所があったが、これを近隣センターに入れて、図書館分館も含めた複合施設として開設 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高度成長期以降、昭和50年頃に開発・分譲された三井住宅や、北柏駅付近の市街化が進展 ・ 新旧コミュニティの融合が懸案となる中、昭和55年に近隣センターがオープン、同時に協議会の母体が設立。※三井住宅の開発とコミュニティの問題が、ふるさと協議会の仕組みが作られた一つの背景という見方がある ・ 利根川沿いには農業公園が整備され、布施弁天とともに外部からの来訪者が多い地域である
初期の活動	—	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昭和60年～63年頃にかけて、まちづくりのための諸施策を実施 — 商業地区への大型店誘致（現マルエツ） — バス路線整備に向けた折衝（対東武バス） — ふるさと祭りの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化活動、スポーツ活動、環境美化活動などを展開 ・ 町会が共同で行う行事や活動を通じ、新住民への働きかけを行う中で、徐々にコミュニティが形成
現在の主な活動	—	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふるさと祭り（柏市で第二の規模でエリア外からも来訪） ・ 防災事業：液状化を想定した防災訓練 ・ 高齢者福祉事業：おしゃべりサロン、敬老会、独居高齢者支援、車椅子貸し出し（地区社協、民生委員と連携） ※地区社協とは平成19年に一本化済み ・ 環境事業：グリーンデイ、中学校との連携による花壇管理など ・ スポーツ・文化事業：グラウンドゴルフ、文化財など ・ 広報誌「広報まつば」の発行 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 八朔相撲（280年の歴史を持つ行事を15年前に復活） ・ 環境事業：ゴミゼロの日、利根川クリーン作戦 ・ 防災・防犯事業：防災訓練、パトロール等 ・ スポーツ事業：三世代ふれあい体育祭（地区社協と共催）、グラウンドゴルフ、ウォーキング ・ 文化事業：文化祭、柏まつりへの参加など ・ 地域史の収集・整理と公表 ・ 広報誌「ふるさと富勢」の発行
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10,540世帯、27,300人、16町会 ・ 町会徴収費と市の負担金で運営 ・ 通常予算 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4400世帯、14000人、18町会 ・ 町会徴収費と市の負担金で運営 ・ 通常予算300万円程度、祭りは別会計で商店書きからも支援がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10500世帯、25000人、22町会 ・ 町会加入世帯率：約70% ・ 町会徴収費と市の負担金で運営 ・ 通常予算400万円程度、別会計の祭り含めて500万円程度が全体予算
協議会の特徴と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふるさと協議会設立当初は、イベントにも地域の特徴が大きく現れていた（例：運動会の狭義に俵を使う、縄を編むなど）が、新住民が入ってくるに従い、誰でも参加し易いものになった。 ・ 地域が広く、開発が徐々に行われたことで、様々な世代が混ざっている。 ・ UDCKの構成団体に入っている ・ エリアが広く、ふるさと協議会、青少年健全育成協議会、社会福祉協議会の境界線がバラバラで一本化は難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新住民ばかりのためまとまりやすい ・ 活動主体の高齢化、担い手不足 ・ 事業のマンネリ化、イベント中心からの脱却（高齢者ニーズの多様化への対応、地域内のニーズの掘り起こし） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歴代の会長は古い地区の住人が多いが、現在活動の中心メンバーは新住民がほとんど ・ 北柏駅周辺等の新たなマンションの町会未加入世帯の取り扱い、関係づくり ・ 活動主体の高齢化、担い手不足 ・ 古い住民のイベント等不参加（初期と逆転現象）

（出典：柏の葉コミュニティグリッドより編集）

2.2.3 柏市におけるアーバンデザインセンターの位置づけ

本節でわかったことは、柏市はトップダウンによるコミュニティ政策の限界と「ふるさと協議会のような地縁コミュニティ」と「UDCKやその他のNPOなどのテーマ（志縁）コミュニティ」の協働の可能性を今後は考えていく必要のある地域ということである。

柏市の歴史を整理すると、高度経済成長期に伴う人口増加、ベッドタウン化が進み、新住民のコミュニティ問題が重視され、コミュニティ政策「ふるさと運動」に伴い住民運営組織「ふるさと協議会」の設立と活動拠点「近隣センター」の建設が進んだ。地域住民の交流を図った行事や各種のサークル活動が盛んに実施された。その結果、新住民同士のコミュニティ、新旧住民のコミュニティが形成されてきたことが成果として挙げられる。

一方で、「ふるさと運動」が提唱されてから約30年が経過し、機能低下や後継者不足などの問題が深刻化してきたことがわかった。そのような中、ふるさと協議会の活性化と、地縁コミュニティ維持のため、行政の対策として新たな動きが見られることがわかった。2001年から「コミュニティ講座」というプログラムを設け、地域の人材の育成や発掘、地域活動の支援、世代間交流、仲間づくりなど、講座を通じて地域活動の参加を促進する講座運営を目的とした新たな取り組みが始まった。コミュニティ講座はふるさと協議会だけではなく、ふるさと協議会から推進される「コミュニティ委員」と行政からの派遣で非常勤職員が共同して企画や運営を行い、外から講師を招き、地域内で閉じてしまいがちな活動を刺激し、活性化しようと試みたものである。

しかし、いくつかの企画を行ってきたにも関わらず、コミュニティ講座による成果が見え難かったことにより、2010年の事業仕分けによって廃止された。成果が見え難かった原因の一つとして、このコミュニティ講座には、教育活動としての市民講座、生涯学習という役割と、地域のコミュニティ維持のためという2つの側面を持っていたことにより、その目的が両立できず、活動の意義が曖昧になってきたこと、活動の規模が小さくなっていったことによって成果を出し難かったことが考えられる。

これに変わるものとして、現在新たな企画として「地域活動センター」という組織を設け、近隣センター内に配置されることが決まり、現在その準備やイベントの試行を行っている。これは、地域内のコミュニティだけではなく、地域周辺の志縁団体とも協力して新たな住民のニーズに対応した活動をしていこうという意味が込められている。

このように、UDCKを取り囲む地域のコミュニティの歴史を整理すると、行政による試行錯誤が繰り返され、これによってある程度の効果があったことがわかる。しかし、現代の人々の生活の多様化や地縁コミュニティの衰退が進む中で、今後は行政だけの施策・実行には限界があり、地域全体で取り組む必要性がでてきた。つくばエクスプレスの沿線開発により、再び新住民の増加が考えられる地域において、行政のコミュニティづくりと連携した、新たなコミュニティづくりが求められている。

UDCKの立地する田中地域は、他のコミュニティエリアと比較しても特に広域であり、柏の葉キャンパス駅周辺の新住民を巻き込んだ体制をふるさと協議会が担うには負担が大きい。さらに距離の問題も含めて新住民の参加は少ない状況である。

2.3 まちづくり拠点としてのUDCKの歴史

本節では、これまでのUDCKの活動を把握し、整理するために、①これまでの年間報告や資料をもとに組織体制や活動についてまとめ、②創設から現在に至るまでの関係者に対してヒアリングを行う。これによって、4年間のUDCKの歴史を把握し、まちの様子と伴に変わりゆくその役割について創設期、始動期、発信期に分けて分析する。

2.3.1 UDCKの概要

■立地と建物

【立地】

千葉県柏市北部地域のつくばエクスプレス沿線柏の葉キャンパス駅前に位置する。コミュニティエリアでは田中地域に属す。

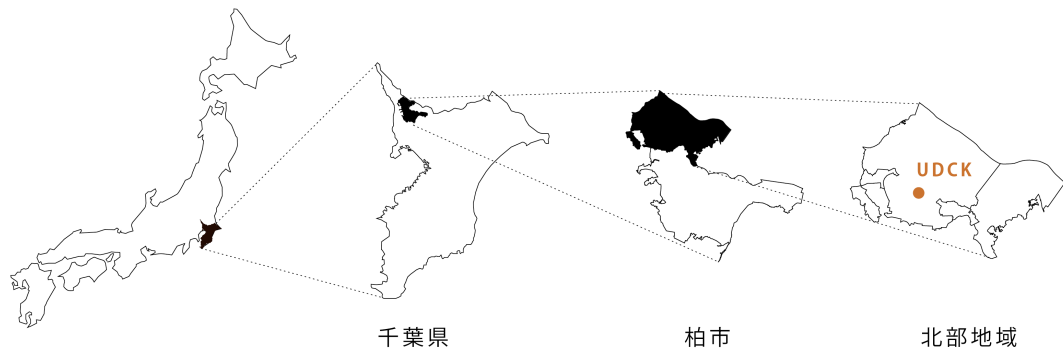


図2-31 UDCKの位置

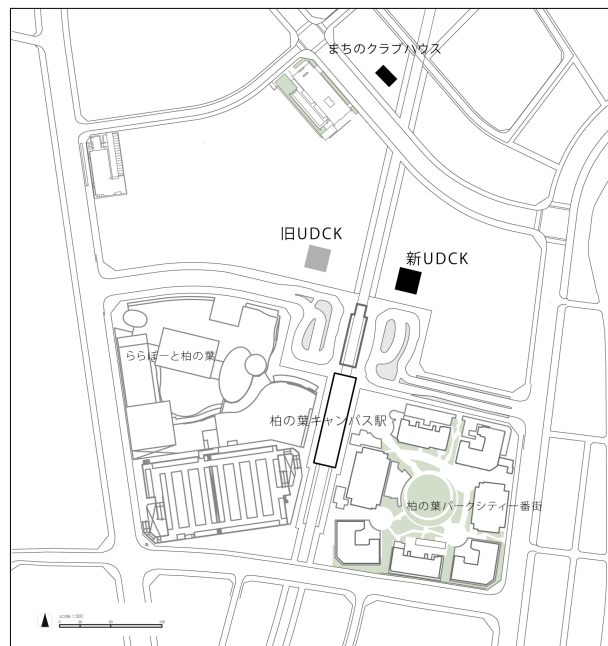


図2-32 UDCKの位置

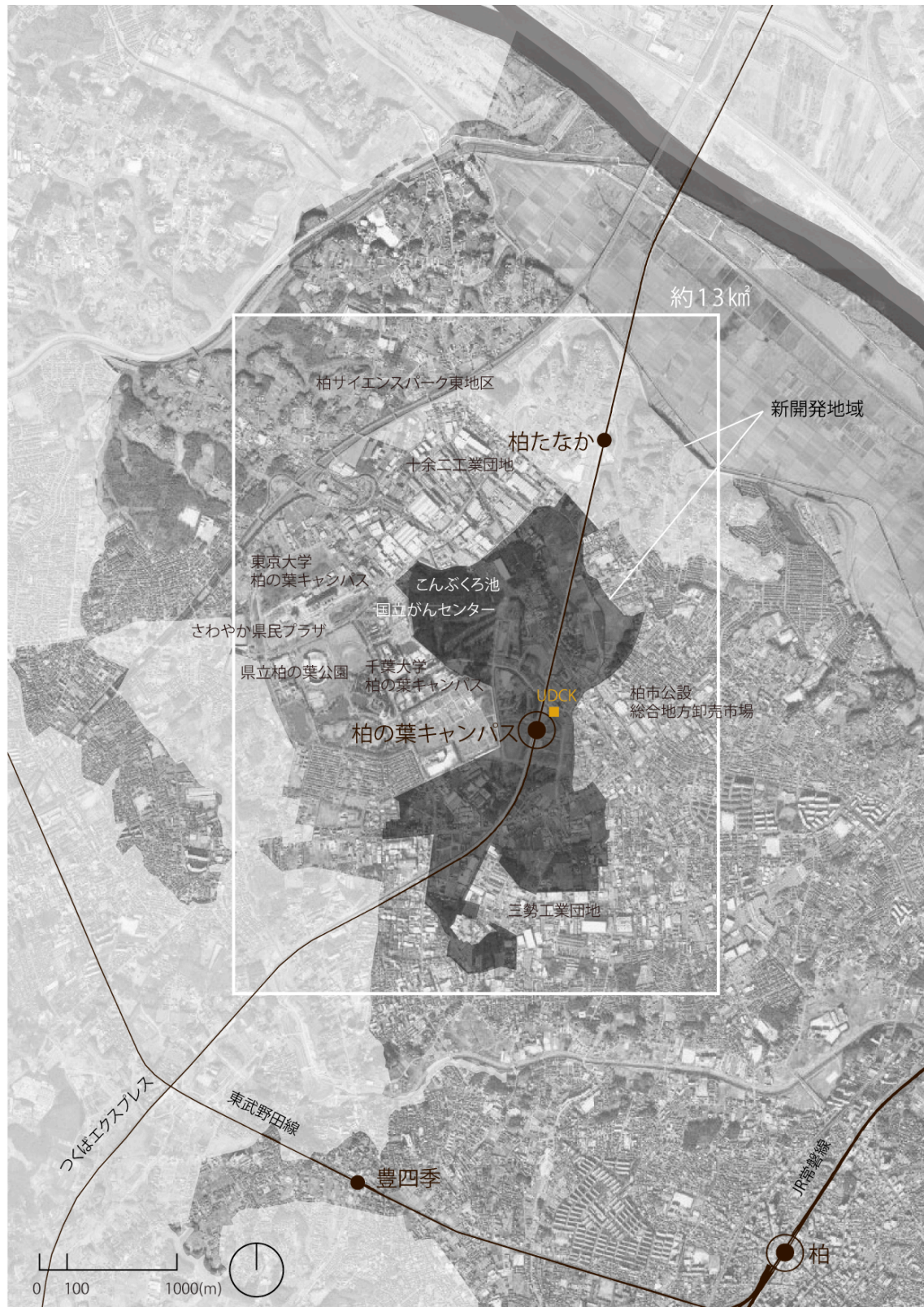


図2-32 柏の葉エリア

【建物】¹⁸

■旧UDCK

柏の葉キャンパス駅西口前に開設された初代のUDCKは、敷地面積約900平米、建築面積約300平米の鉄骨造平屋の建物で、オープンデッキ（約350平米）、ラウンジ（約75平米）、ギャラリー（約140平米）、及びオフィスで構成される施設であった。デッキにはテーブルと椅子が設置され、休憩など市民の日常的な利用のほか、多くのイベントにも使われてきた。また、デッキはその後、PLS、スマートサイクル、公衆電源などの実証実験施設を受け入れる空間となり、これらの施設とともに多様な活動を育んできた。

建物内部では、ラウンジには受付機能のほか、まちに係わる様々な資料を常備し、まちの情報発信を担ってきた。メインの活動空間であるギャラリーでは、日常的な会議や大学等の講義のほか、フォーラム、ワークショップ、市民活動、各種イベントなどが行われ、その利用は年間500回にも及んでいる（2009年度実績）。また、ギャラリーには縮尺1/1000のまちの模型が設置され、柏の葉のまちの状態を発信してきた。

駅前街区の開発事業に伴い、初代UDCKは、開設後3年8ヶ月あまりを経て、平成22年8月1日をもって閉鎖された。

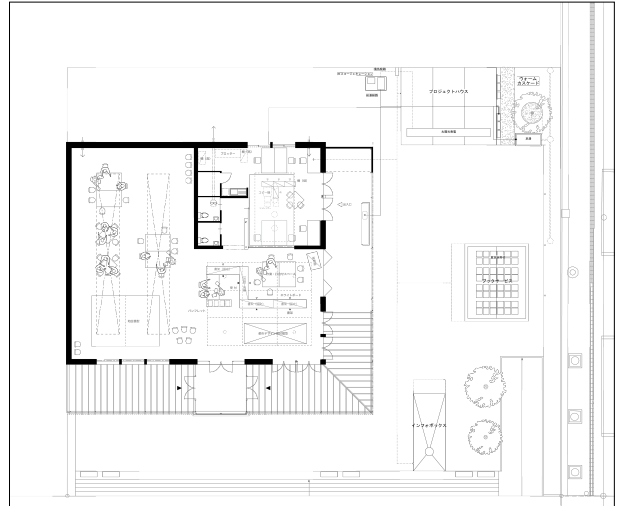


図2-33 旧UDCKの平面図



写真2-14 旧UDCK外観



写真2-15 旧UDCK内観

¹⁸ UDCK HP (<http://www.udck.jp/about/000247.html>)